

株式会社ソミック石川

徹底した行動記録で
クラスター阻止

1916年創業、ソミックグループの一翼を担う自動車部品メーカー、株式会社ソミック石川。静岡県浜松市・磐田市に5工場、世界7か国に展開し、国内約1800人の従業員の半数強が製造部門に従事する。世界中で製造業がダメージを受ける中、同社はクラスターを発生させず、生産に影響を及ぼすことなくコロナ禍を乗り越えた、同社の取り組みを紹介する。

取材・文／武田 洋子



安全管理室 主査

浅野 光伸さん

安全管理部 部長

大石 淳さん

安全管理室
BCMグループ GL

伊藤 剛さん

「ガイドラインのひな型になったのは、2003年に流行したSARS（重症急性呼吸器症候群）の自社対策です。例えば、現在グループ全体のBCPが意識され、文化として根付いたのはあれがきっかけでした。しかし、今回はかなり異なる状況でしたので、保健所に何度も相談しています」（大石さん）

同様に、濃厚接触者になった場合、そしてコロナ感染から職場復帰をする場合のガイドラインも、それぞれ策定。職場復帰の最終段階では本人、上長、産業医で面談し、復帰の可否を決める。幸いなことに後遺症で悩む患者者は少なかったが、あっても体調に合わせられるよう、復帰後の働き方には柔軟性を持たせた。

感染者が出ることは想定内だが、問題は、いかに社内での拡大を食い止めるかだ。対策本部の施策の中で最も有効だったと思われるのが、行動履歴の記録だった。

「目的は、濃厚接触者の迅速な特定です。いつ、どこで、誰と一緒にだったのか、感染者が出たときにすぐに履歴を追えるよう、全従業員に毎日の行動を記録してもらいました」（大石さん）

人事、総務や経理など非製造部門の

感染者が出るのは想定内 拡大防止の策を練る

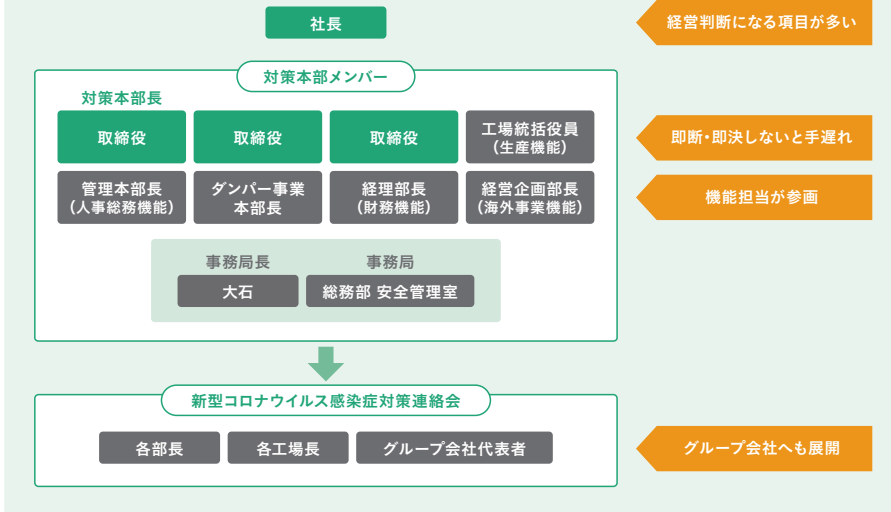
株式会社ソミック石川をはじめとするグループの初動は早く、2020年4月1日、緊急事態宣言に先駆けて「新型コロナウイルス感染症対策本部」を設置している。大石淳さんは事務局長として陣頭指揮を執った。浅野光伸さんはプレーンとしてさまざまな施策を企画し、伊藤剛さんはグループ各社への周知を主に担当している。

「対策本部は、とにかく即断・即決を重視しました。社長を含む4人の役員を中心に、できるだけ体制をスリム化したおかげで、意思決定を迅速化できたと思っています」（大石さん）

ソミックグループのBCPは、人命第一、企業責任、早期復旧を3本の柱とする。企業責任は近隣への被害拡大防止と復旧活動支援を、早期復旧は被害を最小限にとどめ顧客に迷惑をかける体制構築を指す。対策本部の指針になったのはこのBCPだったが、コロナ禍においては、自社でクラスターを出さないことが人命を守り、近隣・地域への被害拡大を防ぎ、生産・納入への影響を抑える最善策だった。対策本部が最初に行ったのは、「もし感染してしまったらどう行動するか」というガイドラインを示すことだ。体調不良を感じたとき、まず連絡すべきところ、連絡を受けた職場が取るべき行動の順序を、端的にまとめた。



図表 新型コロナウイルス感染症対策本部(2020年4月～)



当初、施設の消毒に欠かせなかった防護服。着脱時が最も感染リスクが高いとされ、何度も訓練に臨んだ

クラスターは出なかった。現地の法令に従って運用した海外拠点でも混乱はなく、生産・納品ラインにほとんど影響を及ぼさずにコロナ禍を乗り切ったのだ。対策本部にとって、3年間の総括はどのようなものだろうか。

「事業に影響しなかったという点で、BCMについては一定の成果を実感しています。一方で、在宅勤務が一気に拡大したり、感染リスクの高い喫煙所の見直しが進んだり、今回のパンデミックを機にウェルビーイングへの意識が高まりました。事業も大切ですが、いずれも従業員の幸せがあってこそ。今後は、より『人』にフォーカスしたムーブメントを起こしていければと考えます」(大石さん)

BCPが確立している企業は災厄から学び、一層しなやかで強い組織になる。🌀

メンバーは、1時間ごとに在籍場所と近くにいた人物を記載する。行動範囲全てが記録対象であり、自分のデスクをはじめ、会議室、トイレ、更衣室、食堂の座席まで、細かい項目を埋めてもらった。それを感染症が5類に移行するまで、3年間毎日継続したのだ。生産ラインで働く製造部門のメンバーに関しては、全員の移動のパターンがある程度固定化しているため、そこから外れた場合だけ記載してもらうようにして負担を軽減した。この行動履歴のおかげで、保健所の調査よりも早く濃厚接触者をリスト化し対策できたという。

自社で消毒できるよう訓練 一丸となって乗り切った3年間

併行して、感染が疑われたらPCR検査の段階で現場の消毒作業が行えるような体制を整えた。業者へ依頼しては復旧まで時間がかかるので、従業員が手分けして実施できるよう、保健所指導の下訓練したのだ。班長以上の役付き者全員を対象に作業要領のマニュアルを作り訓練。また、防護服の

着脱方法の動画を全社員に展開し、各工場単位で訓練を重ねた。国の方針や公的機関の助けを座して待つのではなく、自社で情報を収集し、どんどん行動に移していく決断の速さこそが、BCP・BCMを成功に導く。

消毒用アルコールや食堂席の分離パネル設置、非接触トイレドアの自作、注意喚起のポスター掲示、換気状況を可視化したマップ作成、マスクや抗原検査キットの配布……。変化する状況に合わせ、次々と手を打っていった。毎週水曜日に対策本部会議が、翌日には各部門長・工場長・グループ会社代表が参加する「新型コロナウイルス感染症対策連絡会」が開かれ、トップの意向は速やかにグループの隅々まで通達される。

「かなりの行動制限をお願いしたので、『親族の集まりにも出てはいけないのか』など反発の声はありました。しかし、グループとしての意図を理解する班長など身近な人との対話により、最終的には納得し、みんなが協力的でした。基本的には真面目で誠実な社風のおかげもあったでしょう」(大石さん)

株式会社ソミック石川

本社所在地
静岡県浜松市中央区古川町500

創業
1916年5月

代表者
代表取締役社長 斉藤 要

従業員数
1805人 (2023年4月現在)

事業内容
自動車部品の開発、設計、製造、販売

企業サイト
<https://www.somic.co.jp/>